

離郷について考えること

三年 齋藤 辰也（平成三年度）

三月限りでぼくもふる里を離れなければならない。ということは親とも離れるということだ。今思うと、十五年があつという間に過ぎ去つたような気がして時の流れの速さに驚かされるばかりだ。生まれてからこれまでこのふる里でいろいろなことを学んで来たと思う。ぼくがこの島に生まれて得たことが二つほどある。まず一つは、自然に恵まれるのびびと生活できるということだ。周りは海にかこまれ、島には、緑が一面に広がっている。

なぜこのことが自分にとって得たかと言えば、もし自分のふる里から水平線が見えなかったり、緑が少なかったりしたらなにかもの足りないような気がするからだ。簡単に言えば、ぼくにとつて自然は宝物のように好きなものの一つなのである。

二つ目は、人間関係である。島は人口が少ないため、何をするにもみんな協力してやっていかなければいけない。学校でも同じようなことが言える。全校生徒は少ないもののその倍以上の人数の学校に優るとも劣らないパワーをもっている。これはみんなの協力にかかわつてくと思う。人を

助けるということは大切なことであつてこれができないと立派な人間にはなれないと思う。その点ぼくは人の少ない所で育つたので協力しなければならぬ機会がたくさんあつた。だから協力することが身についたということでも、この島に生まれてよかったと思つてゐる。

今まで、十五年間の自分自身の思い出といえば、やっぱり自然にふれたことである。ぼくは海が大好きだ。特に飛鳥の海は大好きである。しかしこんなに好きな海でも不思議な思い出がある。三歳のころである。父が漁から帰つて来たので、母といつしよに迎えに行つた。父と母は魚を網からはずしていてぼくから目をはなしていた。その時だった。ぼくは海に落ちてしまつたのである。父と母は慌てていた。結局父が海に飛び込んで助けてくれたのだが三歳のころのこんな記憶がなぜこんなにはつきりとおぼえていたのか、自分でも不思議だつた。父がすぐに助けたせいもあるが、母親の話によると、手をばたばたさせて岸壁の方に寄つて来ていたと話すのである。それにしても不思議なものだ。今思えば、海に初めて触れたのはこの時だったかもしれない。

しかし、海との思い出は、こんな不思議なものばかりではない。なかでも一番の思い出は、八歳の夏、足のつかない所で泳げるようになったことだ。ぼくは、意外に負けず嫌いの所があるので、兄が泳いでいるのを見て、自分も足のつかない所で泳いでみたいと思つた。それから毎日毎日練習した。

しかも、兄からは一度も手伝ってもらわなかった。そして、必死に練習していたときのこと。突然、何かが流れてきて、それを取ろうとしたら海に落ちてしまい、取ったときには、もう泳いでいた。という、なんともあっけない話である。しかし、そのときはとてもうれしくてたまらなかったことを覚えていいる。人の力を借りずに、自分の力で泳ぐことができたからだ。この思い出は、一生忘れはしないと思う。

こうして十五年間を振り返ってもきりが無いが、ぼくにとつて、今までの十五年間は、「第一の人生」のような気がしている。そして、これからは「第二の人生」であるような気がする。「第二の人生」は、自分のふる里を離れたときから始まる。今まで親しんできたふる里を離れ、新しい道を進んで行かなければならないのだ。

今までの十五年間は、これから始まる人生の準備だと思う。だから、こんなに素晴らしいふる里に、ぼくは「ありがとう」と言いたい。そして、このふる里はぼくにとって、一生の宝物になるだろう。